これで『ガロ』を買って下さい

三本義治

例えば酔って誰かがチンポを出して、自分にも要請があったとします。自分としてはこう仕方ない、ここはひとつ肝を据えて…という感じで、サービスの心算（つもり）でチンポを出したら、後で横にいた女の子に軽く「楽しんでたわねー」などとニコニコ言われた時などは（実際の話かどうかは定かでないが）やはり何もがんばったりしない方がいい、とつくづく思いませんか？

漫画描きは変な人が多い、という世間（って誰だ?）の見方と同等に、雑誌（特にエロ本や、あまり名の知られていない漫画誌）に登場している人や、それを作っている編集さん等も、素直にそのまま、そのイメージに従って努力していると逆に世間（ってだから誰でどんな事をしている人達なんだ?こ）の人達から「あぁこの人努力してるんだな」とは評価されず、たいてい迷惑な人、やな事をやる人だなぁ…とあっさり断絶されてしまっちゃうもんですね。だから人間にとって一番難しい『なにもしないでいる』という事を実践している人達はとても偉い。つい人の役に立とうなんて余計な事をしてしまったり、人の人生を変えようとして無理してしまったり、そうやって自分の単なる欲望に負けてしまうのが普通の人間のやる事だってなもんだって僕は思います。なおかつ人にやってしまう事は、その当人が思う役に立つ事だから、直してもらわれる人とは食い違っており、何も直り様が無い。受ける方も受けるとか受けないとかいうのでも、直った直らないというのでもなく、そんな現象はこの世が、どこからどこまで行ったら終わりという納得がいつまでも出来ない様に感情の確認がいつまでも取れなく、それだけならまだしも、それをガッチリ握ってもう離さないで❤❤よしっ確認☺っていう風にしたい人には届かず、全然わけのわからない人に届いて勘違いのプレゼントをもらったりしてしまったりもするのでともかく人の役に立とうなんて事は大犯罪だと思う今の僕。

さて何でこんな事を書いたかと言えば、長井さんの阿佐ヶ谷ガード下での漫画教室（約7年前）の生徒、それが僕。長井さんは山の中でばく然と短銃を隠したとか犯罪のことはしゃべっていたと思う。でもそれが本当の意味で、人の役に立とうとする様な犯罪者だったのでしょうか?…さてその部屋ではミシン教室も普段はかねていて、ミシン教室の注意書きも壁の後ろで犯されていたのだろうか?ミシン教室の注意書きはミシン教室での役目があったろうに…ミシン教室の生徒の為であったろうに…何故長井さんがミシン教室で、ミシンの貼り紙に向かって拳銃の話や、基礎デッサンの推奨や、お菓子やおつまみや、ビール等を取りそろえての親睦会や、天ぷら処での会食等を設定したりや、5百円玉を生徒一人一人に渡しては「これで自分の近所の書店で『ガロ』を買って下さい。無い場合は取り寄せてもらって下さい」と言ったりや、手作りらしい不定形なハンコで月謝袋に印を押し、それを遅れて何度も払わない自分に「今度でいいですよ」と言い、模写をする為につげ義春さんの「紅い花」の頁をコピーして来たり、青林堂の単行本を毎週サービスで配布してくれたり、毎月5百円玉を生徒一人一人にまた渡しては「これで『ガロ』を近所の書店で買って下さい」と言い、ある時は一人の人から「僕は毎月ガロは買ってますからいいですよ」と言われると「じゃあ2冊買って下さい」と言ったりや、授業が終わって皆な帰った後なのに「原稿を見て下さい」という生徒（僕僕）がいたら「はい」と言って見て「サインペンで書いちゃだめだよ」と言ったりや、それでも半年間授業料も払わずスッポかして逃げた生徒（これも僕僕）がいたりや、いったいどういうつもりでそういうことをしていたのかわけがわからないのでとりあえず自分の事しか考えていない僕にははき出さないではいられませんので書いたと言おうこの文を。

僕の頭の中にある事は長井さんの思いとは全然違ってる事は明らかであるからやっぱり自分にとっても誰が死んでも何があっても、いつも通り生活していくという事に関しては本当に余計な事だ。おいしく物を食べて、いつも通り仕事（当然漫画）で楽しみ、万が一にでも人の役に立つ様にとか考えたりしない様に適当に人付き合いはする事に心懸けて、自分の楽しいと思う事だけをやり、あとはバイトと称して自分の見たい物を見、聞きたい事を聞くだけでお金をもらって楽ちんに生きていこうと思います。

そういった取材好きで全面的に正しいと思っている自分にとって、あまり関係ないと思っている事ですが、今この文章を書いているのは2月11日で、目前に迫った「長井さんを偲ぶ会」に向かうにあたっては、聞きかじり見かじりで得た情報によるとお葬式で笑うといわれる蛭子さんがもし出席されていたら、一体どうなるのだろうか?という事で、それだけは是非確認してみたい、と今から楽しみに思っています。

長井さんにやさしくされた　安彦麻理絵

「あら、あのおじいさん死んじゃったの?」と、うちのお母さんもゆってた。

うちのお母さんは、別にガロには興味は無いようだが、長井さんの事は、一番最初にウチの娘に電話くれた漫画の編集者ってことで、時折、話題にするのだった。「あのおじいさんも元気だね。」とか。

考えてみると、長井さんは、私が生まれて初めてしゃべった漫画の編集者である。

なんだか「いいひとに処女もらってもらった」よーな、そんな気分だ。長井さんは電話で、一番最初に「あなたのマンガね、おもしろいからのせますよ。」といってくれた。

私は、あんまり青林堂に出入りしなかったから、長井さんとは、たくさんオシャベリしたことないのだが、でも長井さんは私の事をおぼえていてくれた。――とゆーか、「おじいさんだからもう、私の事忘れてんじゃないのかなア。」とゆーのが、私の通常の正直な気持ちで、でも、長井さんは私の事、おぼえていてくれた。おととしだったかの、ガロのパーティーの時も、なんかすっげえ久しぶりだったけど、髪型だって変わってたし(私が)いちおー化粧とかして「私、前とはずいぶんちがうと思うの❤」みたいな気分でいたのだが、長井さんは私の事、忘れてなかった。

「あなたはマンガ書き続けなさいね。」といわれた。会うたびに長井さんは「書き続けなさいね。」をいってた。私が「エアコン買えるくらいお金が入ったんです。」といったら長井さんは、「よかったねえ。」といってくれた。

私は長井さんに、やさしくされた、と思っている。やさしそーな長井さんにしか会った事ないから、コワイ長井さんって知らないのだ。やさしくてもコワくても、とりあえず私は長井さんの事、すっごくエライ人なんだろーなーとわかっていても「青林堂のおじいさん」ってふーに思ってて大好きだった。大好きだと、私は、その人とのお別れシーンを頭につい、思いえがいてしまう人間なのだが、「長井さん、私よりすごく年上だから、多分私より先に死んじゃうんだろうーなー。」と考えた事がある。そーゆーの、やだな、やだなーと思いつつ。んでも、やっぱり私より先に死んでしまった。

でも、私は、長井さん死んじゃったってゆーの、ぜんっぜんピンとこなくてホントは信じられない。ホントに信じらんない。

初めて青林堂行った時、たくさんの本に、うもれるみたいに、長井さんがイスに座って、私は「ああ〜本物だぁー。」と思った。

行く前に「ガロ編集長」読んどいた私は、本物を見て、すごくドキドキした。本物、本物、本物。その後、近所のキッサ店にメシ食いに連れてってくれて、ピラフとアイスミルクティーごちそーしてもらった。私がピラフ、がつがつ食ってんのに、長井さんは、紅茶しか飲んでなくて、イヤ〜、いいのかなァーなんて思ったけど、長井さんはニコニコしてて、そんで二人で古本屋の話に花をさかせた。

私はずーっとドキドキしまくりっぱなしだった。そんで、ひとしきりオシャベリが終わると、長井さんは私の事「麻理絵ちゃんはカワイイねえ。」なんてゆってくれたもんだから、私はもーすっかりドキドキ大爆発だった。(私、どー見ても皇室系のブス顔なんだけどー。犬顔とか言われるしー。)

しかしなんだなー、こうして書いてみたら、コレはまるで、初めて初デートした女のドキドキ物語じゃないかー。

ウワサによると長井さん、女の子にはヤサシイって聞いたから、きっと、私以外の子にもこーゆー事ゆってたんだなー!?くそー!!

なんて、今さらヤキモチやいても仕方ないんだけど、あの時私をあんなにドキドキさせといて、死んじゃってー、んもー、ってカンジだ。

長井さんて、やっぱし、モテモテの人だったんでしょうか?

私の事、いつもおぼえといてくださってホントにどうも有難うございました、長井さん。

私は長井さんが、大好きです❤

隣の部屋に行った長井氏へ

ヤマダリツコ

長井氏と言えば木造モルタルの王国のすみっこに　ちょこん　とすわっていた事が一番記憶に残っている。デビューしたての頃、一階の材木屋を青林堂とカン違いし、さてやっと見つけた編集部の扉を開けた時、王国の主はいたのだ――すみっこに。

その頃の私と言えばナマイキもいいところの大バカ者で、ただの傲慢な奴だったと思う。

担当である白取氏の助言があるにもかかわらず、ちっとも学習していなかった（今度、ごはんおごります　すいません。）

そのせいかどうか知らない　が、ともかくも長井氏と話す機会が与えられたのだ。

――一回だけ。

きっかけは私のマンガに出てくる男の子のことだった。

「こんな軟弱な男は今いないよー。」と長井氏。

「いや、今時の男の子ってああですよ。」と白取氏。こうしたやりとりが少しだけ続いたのち　長井氏はこう言ったのだ――。

「あんたのマンガには強さが足りないな。」

これは実は今でも悩んでいる。強さとは何だろう、どうすれば強くなれるのか？

そしてその後「これ読んでね、少し参考にするといいよ」と長井氏に一冊の本を手渡された。これはサスガに不謹慎なのでハッキリとは書かないが、まあ私と同じ名字でもう死んじゃった女の子の本、とだけ書いておく。

ともあれ　私と長井氏との思い出、というのは後にも先にもこれっきりである。

その後、青林堂内部が少し変わり、長井氏も編集長から社長、会長へと変わっていった。その頃には編集部にもおらず、パーティで会える程度になってしまった。そういった意味では、長井編集長時代にデビュー出来た事はとても貴重に思う。（その割には大した事してない自分が憎いが。）

さて　その長井氏の死を今でも私は実感がわいてない。実は編集部に行くとすみっこにちょこん　とすわっているのではないか　という気が今でもしている。

そう感じるのは多分私だけではないと思うが。（私だけかな？）

今は亡き木造モルタルの王国の主に合掌。（実感ないけど）

illustration:Ritsuko Yamada

何かある

森下裕美

同じ日に、ガロと少年ジャンプに持ち込みに行きました。もう世間知らずというか、非常識なマネしてました。長井さんに、何かアドバイスをもらった記憶はないのですが、「女のコだからいい、女のコいっぱい来て欲しい。」の様な事を、おっしゃったと思います。

ある時期だけのガロと長井さんしか知らないし、ガロでは少ししか描かなかったのですが、何か得体の知れないパワーとか、すごく感じました。別に長井さんが、得体の知れないパワー出してるわけじゃないんだけれど、やっぱり呼ばれると言うか、何かあるんでしょうね、長井さんて。

長井さんがいなくなって、青林堂も神保町から移ってしまったけれど、長井さんのいた、材木屋の二階の本だらけの青林堂が、私のガロでした。

ご冥福をお祈り致します

逆柱いみり

もうずいぶん長い間、最近のガロはつまらないとかやめたほうがいい等と言われまくっている中で、長井さんは逝ってしまった。

ガロという雑誌の歴史の重さが一気にのしかかってくる。実際自分は良い漫画を描いてきただろうか。読み返すのも苦痛な程の駄作がほとんどだったように思うけれど、どのような考えで載せてくれていたのか。

青林堂を初めて訪問したのは四作程描いた頃だったと思う。天気の悪い日で材木屋の2階は薄暗かった。親切な長井さんだったけど緊張していたため、窮屈な窓辺の席でしゃがれた声で喋っていたのは夢の中の事だったかなというような消えそうに薄い記憶だ。

その後3回位は会っていると思うけれど、直接話しを聞いたのはその時だけだったので、おぼろな記憶になってしまった自分の頭の悪さを残念に思う。

世界3大おじいちゃん

花くまゆうさく

僕の心の中には、この広い世界中の中で3人偉大な人がいる。題して”世界三大偉人” または”世界三大おじいちゃん”だ。

その3人とは、けっして、ルー・テーズ、力道山、手塚治虫ではない。

僕の世界三大おじいちゃんとは、カール・ゴッチ、エリオ・グレイシー、そして長井さんだ。大山倍達、木村政彦、ビクトル古賀などもそうなんだけど、おじいちゃんというイメージではないので、次点にしてもらってる。また、塩田剛三はランキング4位だ。

こんな世界の偉大な格闘家達と、タメ張って肩を並べてる長井さんは、本当に凄い人だ。こんな人、今の日本の中では、長井さんしか、見あたらない。

こんな凄い人に、少しでもかかわりを持てて、僕はとても凄くうれしいのです。

ガロに参加できて、本当にうれしかったです。ありがとうございました。

「長井さん」と「悪魔くん」

蜂巣敦

子供の頃から印象に残っている漫画の場面に、水木しげる氏の「千年王国」のラストがある。救世主「悪魔くん」を裏切るユダの役回りをした男が、同じ十二使徒の蛙男に説教されるところだ。「貧乏人や不幸のない理想社会を作るのは、遅かれ早かれ人類に残された宿題であり、悪魔くんはそれを実行しようとしたのに、お前はそれを現実の金になるからといって売ったのだ」と詰られる間、体を壊し結局社会からはじかれて零落した男は、じっとうなだれて聞いており、苦しそうに呻きながら「僕が悪かった」と言う。「週刊少年ジャンプ」連載当時、小学生だった私にも、その後悔の念はヒシヒシと伝わってきた。前号の追悼特集で、長井前社長が、ちょっとした食物でも社内の皆さんへ執拗に平等に分けられた等のエピソードを読んで、個人的には殆ど知らない氏が、この「悪魔くん」にだぶって思えた。理想社会を見据えていたという大仰な表現を避けるならば、やはり、人の傷みや弱さに非常に敏感な優しい方だったのだろう。そして、実践の人だった。ご冥福をお祈りさせて頂きます。

画・中ザワヒデキ

追悼
自動書記

胸にくる言葉

秋山亜由子

私は、長井さんに一度もお会いしたことがなく、直接にも間接にもお話をお伺いしたことはありません。ですから〝長井さん〟などとお呼びすること自体、とてつもなく厚かましいような気がしまして、たいへん気が引けております。

でも、長井さんのご著書やガロ誌上でのお言葉は不思議なほど現実感を持って胸の中にあります。特に厳しいものなどは、まるで直接に聞いたような気持になってググッとしてしまったことが何度もありました。

これからは最新の長井さんのお言葉を読むことができないと思うと本当に寂しくて、残念でたまりません。私にとっては、胸にググッとこたえつつ漫画をもっと好きになるお言葉ばかりでした。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

長井さんとしゃべりたかった

小野明弘＋野口専二

長井さんとしゃべりたかった。僕たち二人の描く漫画はどうだとか、現在のガロはこうだとか、いろいろと話してみたかったんだ。でも、もう遅い。残念だ。

長井勝一という名前は、ずっと前から知っていた。なにしろ、ガロを創刊し、今日まで育ててきた人だ。偉大な人だと思う。僕たちが自由に漫画を描けるのも、自由に表現することができるのも、みんな長井さんのおかげです。感謝…。

小野と野口は、ガロに描くことによって人生を充実させている。ガロの無い世の中なんて考えられない。ガロでなくちゃ駄目なんだ。そう思っている。

長井さん、ありがとう。そしてさようなら。

佐野史郎

長井さんにお会いしたことはないけれど、「ガロ」との出会いが現在の私の俳優業に大いなる指針を与えて下すっているのは確かなようだ。

感謝。

平成八年二月

佐野史郎

古屋兎丸

昨年の新人特集号でいただいたお言葉
いつも胸に抱いています
長井会長が表紙を飾った、ガロは
僕の入選作を掲載していただいた号でもあり
一生の宝物です
心より御冥福をお祈りいたします
頑張りますので　どうか見守っていて下さい

古屋兎丸

「これは絵だね。」

何を書いてもいいはずなのに、ものすごく書けると思っていたのに、何故か筆が進まない。一行目に「長井さんはぼくの青春そのものでした」と書いて、**「やはりこれはぼくの言葉じゃない、きっと別の誰か、この言葉に適した人がいる、ぼくには大それた言いまわしだな」**と思い、消した。次に、**「僕はその当時マンガ家志望だった。二十才で……」**と続けようとしたが、これでは長井さんに対するぼくの思いに到達するに、時間がかかり過ぎてしまうと思い、やはり消した。短いセンテンスで、がぶりと一言で言ってしまった方がいいのだろうけれど、とてもじゃないが恥ずかしいのです。甘酸っぱいのです。それに二十才当時の自分の事を思い出していたら、あの「ガロ」に、自分のような者が、長井さんの事を書いていいものかと我にかえり、呆然とし、緊張してしまう。げんに、今、緊張しています。

思い出す、二十才の時だ。僕はガロの編集部の戸を叩いた。マンガの持ち込みだ。そうだ、自分なりに自信があった作品だった。時間をかけた力作である。海を書くために、海へでかけ、山を書くために山へでかけて書いた入魂作である。努力は買ってくれ。編集部へと続く長い長い階段を登りつめ、心臓はいよいよ高なる、戸口を前にすると、さっきの自信はどこへやら、不安だけ。――ノックする――「どうぞ」と向こうで声がする――いやな瞬間です。戸を開ける――。あの、長井さんがいる。

他の編集の人たちは顔をあげず、黙々と仕事をしていた気がする。僕は髪ボサボサで、きっと汚いナリをしていた。

長井さんが、（そこに座りなさい）というような事を言われたのか……とにかく僕は長井さんの正面に腰をかけた。長井さんが僕の「力作」に目を通していく。紙をめくるのがやたらに早い。不安だった、気になる箇所があったかどうか、それともあまりにサッサッと目を通したら可哀そうだなあと長井さんが思ったかどうか、とにかく一枚だけ、やや長くジッと見て下さった。少しうれしかった。そうして全部読み終ると、長井さんは一言。

「これは絵だね。」

「はあ。」と僕。絶望感……（駄目だ駄目だ、ああ…海を書くために海まで行ってデッサンするなんて駄目なんだ…結局、漫画のダイナミズムとは無縁の独りよがりの〝コギレイな絵〟に過ぎないんだぁ…）と、思った。しかし、長井さんは、その一言だけではなく、そこから約十年くらい僕のトラウマになっちゃう程の、ショックな言葉を続けた――。

「まだ、他人の気持ちが、よく判らないんじゃないかな。」――他人の気持ち他人の気持ち他人の気持ち…この言葉は、それから長い事、脳内に響き続けた。一体、何年ぐらいその言葉にこだわってきたことか。「他人の気持ち」トラウマから逃げられず、他人の気持ちが判るためにはどうしたもの

かと、恥ずかしい話ですが、二十才から何年もの間、悩まされた……笑われてしまうかもしれないが、長井さんは、僕にとって、そういう人なのだった。

　まぁ、とにかく、その二言を、長井さんはおっしゃられた。我が「力作」が長井さんにかかっては二言で完結したのだ。イスから立ちあがれなかった。それでも何とか気をとりもどし、かすれ声で「ありがとうございました」とお礼を述べた気がする。コートを手にとり、ヘナヘナと戸口へむかう僕に、長井さんは、ポツリと「外は寒いから、コートを着ていきなさいよ。」と声をかけてくださった。確かに、外は、暗く寒かった。

　それからは、もうマンガ道を極めんとばかり、毎日が修業だった。（あきらめずにもう一度、あの戸を叩くんだ——今度は「絵」じゃなくて「漫画」だぞ！）とにかく本を読み漁り、映画をハシゴした。映画だけで年間、何百本と観ていた。それも長井さんの（マンガ家になるには、いい本を読み、いい映画を見る事だ）という教えに従ったためかもしれない。

　そして今日、何故か僕は映画カントクのはしくれとなり、現在に至った。マンガ家にはなれなかったが、あの時、長井さんの教えに従って映画を見まくったせいで、いつのまにか映画を撮り続ける事になった。その土台を作ったのが、（いつか長井さんの前に再び）という思いからであるとすれば、あの時、長井さんの言葉一つ一つが僕に与えた影響は測りしれんと思います。

　当時の事は懐かしく思い出す半面、やっぱりどこかで、今だに長井さんの言われた戒めにドキリとさせられる。自分がどのくらい他人の気持ちを理解できるようになれたかを判断していただく事も、不可能になってしまった。長井さんに（うん！　いいね！マンガだね！）という栄光の言葉をいただく事は、映画で賞をもらったりする事より強力な栄光だ。だから今だに、最近「ガロ」でデビューしていくマンガ家の方々には最強のシットを禁じえないのです。

　長井さんに誉められ、「ガロ」からデビューするという最高の栄誉が、永遠に手に入る事が失くなってしまったと思うと、気が滅入ります。それでもどういう御縁か、このような形で、当時の事を長井さんに感謝したい気持ちです。長井さんに書けと言われてもないのに、何故だろう、でも不思議と長井さんに感謝したいと思うのですから、そうなのです。長井さん、ありがとうございます。

　最後に。実は長井さんとはもう一度お会いしているのです。すみませんね、二度目の挑戦、つまり再び、持ち込み、ですね。「絵だね。」と言われたマンガからとにかく脱皮しようと、もがいた末、もうヤケのヤンパチ、とんでもないシロモノを作って大急ぎで走って階段をかけあがり、戸を叩いた。長井さんにゲンコーを渡し自分はイスにすわり、目をつぶって答えを待った。長井さん一言。

「これはラクガキだね。」

——マンガ道は、険しい。

子

（映画カントク・東京ガガガ主宰）

すごく心配である。　パルコ木下

長井さんが亡くなって二週間ほど後、自分の祖母も他界した。真ん中には岡本太郎なんて人も死んでいる。どんどん年をとった順から亡くなるという当たり前のことが、30の人生半ばの僕にさえ避けられない死の恐怖としてじわじわとのしかかってくる。結局人生は、本人が生まれて死ぬまでの間を早いか遅いか感じるだけ、みんな一緒なのだ。

突然だが自分から見れば家族でも第三者から見れば生き物と物体ほどの隔たりがあるという、面白いエピソードを紹介しよう。

葬儀場で消却された祖母の体は思ったより綺麗で骨格などしっかり残っていた。健康マニアで毎日牛乳を飲んでいた祖母らしい話なのだが、頭蓋骨がそのままの状態で焼き上がり、これでは骨壺に入らない。役場の職員に頼まれて僕は自分の祖母の頭を長い箸で粉々に叩き割った。

骨壺はあまり大きな物を買うとお墓の中が窮屈になり、後々世話になる者(自分も)がつかえるので、なるべく小さい物を買うように言われていたが案の定、祖母の体は半分が壺の中へ、残り50%は焼却台に取り残された。壺に入らなかった骨のことがどうしても気になる。今後の事を訪ねると死体の処理を引き受けてくれる業者は全国でも極端に少なく、僕の生まれ故郷の徳島では静岡の業者に委託して引き取ってもらうのだという。それはもう単純に「ゴミ」として、山ん中にでっかい穴を掘り、とにかく穴が埋まるまでいろんな骨を捨ててくのだそうだ。

自分の血を分けたおばあちゃんがこのとき「ゴミ」と「魂」に分別された。僕はめらめら焼けている骨を記念に持ち帰る度胸はなく、ただ骨からどんどん出てくる湯気を出来るだけ吸い込み、少しでも僕の魂の中に宿ることを祈るのみだった。「所詮形は形でしかない。」

さて、長井さんはいったいどのような最期を迎えられたのだろうか。僕にとっては非常に恐れ多い人だったので今はただ、長井さんが生きてるうちにデビュー出来たことがラッキーだなと感謝するのみだ。生前「煙のごとく消えたい」とおっしゃっていた事を後で知り、僕は自分の体験としてかつて、おばあちゃんにしたように、「ならばその煙、ぜひ吸わせていただきたい」と少し願ったがしばらくして冷静になり、昔のガロを再び読んでみたりした。長井さんの煙は吸えなくてもガロのインクの匂いは吸えると思えば「ああ、この人の魂はここにある」と不思議に落ちつく事が出来た。本が遺骨の代わりになるなんてかっこいいじゃないか。

ただ、どうしても長井さんのいない「ガロ」に今後の心配がある。昔、自由な表現がガロだけだった時代と違い、今は何でもありなメディアの表現が可能な時代だ。敢えて荊の道を行かずとも今はチャンスの多い豊かな世の中なのだ。

そこである日金のない才能を持った若者が作品を持ってビクビクしながら青林堂の門を叩く。編集者は「ギャラはでないんだよ。」と苦笑いしながら「てんぷらでも食いな」と五百円を渡してくれるだろうか、「ギャラの代わりに好きな本持っていきな」と言ってくれるだろうか。……そんな編集者がいるうちはまだ大丈夫だが。(どうでもいいことだが、僕は白取さんにメシをおごってもらったことがあり、谷田部さんに漫画を貰ったことがある。僕が選んだのは唐沢商会の「近未来馬鹿」)そういう些細なことで人間とは一生離れられなくなる生きものなのだ。

実はガロを支えていたのは世間ではノーギャラで快く執筆した作家達という風に言われているが本当は違う気がする。安いギャラでも快く描かざるをえない様なおいしさをガロ誌上に持ち続けた編集を長井さん達が行っていればこそだと自分は思っているのだ。

従って残された編集部員の皆さんにはおくやみの言葉ではなく、かなりキッツイ言い方なのだがガロを終わらせるには今回の長井さんの死という出来事は与えられた機会だったのにとも思う。

長井さんのいない「ガロ」に今後とも新しい才能が集まるか心配だ。第二第三の長井さんみたいな漫画ド阿呆な編集者が今の世の中で生き延びるかどうかはきっと新人漫画家の発掘よりももっと大変だ。

でも僕にとってガロは見た夢そのものであり夢が見れない人生なんて考えられない。

気持ちとしては「あとちょっと、もうちょっと、あとほんのちょっと、」て感じでしぶとくねばって欲しい。

僕はガロのある国に生まれてきて良かったのだ。これからもガロをやるんなら長井さんを越えなければ意味がない。もっと面白くしよう。面白いなら僕も一生ついていこう。取りあえずガロで我々は日常に喧嘩を売ろう。色々な物や事に対して、(でも本当はすごく心配である。)